

No	感染症(PT)	出典	概要
407	細菌感染	ProMED-mail20070108.0079	チェコBrnoでリステリア症の原因菌によりここ2週間で2名の女性が妊娠20週目に流産し、もう1例ではリステリア症が新生児に伝播したが、その子供は生き残った。感染経路は不明であるが、3名とも熟成中のチーズが好物とのことである。同国では以前このチーズ中に病原菌が発見された。同国では2006年には8名がリステリア症で死亡し、計62名がリステリア症と診断された。2005年の4倍以上であった。
408	細菌感染	ProMED-mail20070226.0696	中国Heilongjiang省で1年以上前に始まった奇病で1000人以上の労働者が解雇された。300名の患者がまだ病院で治療中である。感染源は政府が彼らのために購入したヒツジであると労働者たちは主張している。検査の結果、ヒツジがブルセラ症の宿主であった。
409	細菌感染	ProMED-mail20070809.2584	米国Vermontではシカダニ(クロアシダニ)によって伝播される感染症であるライム病の報告症例数が過去2年で2倍となった。2005年は29例、2006年は62例で、今年(2007年)は今までに71例が報告されている。症例は同州の南部に集中している。
410	細菌感染	Public Health Agency of Canada/Infectious Diseases News Brief 2007年7月27日	英国において2007年上半期のライム病確定症例数は198例であり、2006年同時期の194例と類似していた。2006年通年の暫定的な総報告数は768例で、1997年にサーベイランスが導入されて以来、3500例以上の確定例が報告されている。英国人10万人当たりの年次発生率は1997-2000年は0.38人、2002年は0.64人、2006年は1.46人と増加している。
411	細菌感染	Transfusion 2007; 47: 1134-1142	アメリカ赤十字で2004年3月1日～2006年5月31日の期間に1,004,206例の供血で細菌培養検査が行われ、その内186例が陽性であった。関連するアフエーシス血小板293製剤のうち1件を除くすべての輸血が回避された。両腕法を用いて採取した場合の細菌培養陽性率は、片腕法と比較して有意に高かった。また、スクリーニング陰性の製剤に関係した敗血症性輸血反応が20例(うち死亡3例)報告されたが、両腕法を用いて採取した場合の頻度は片腕法と比較して4.7倍であった。
412	細菌感染	Vet Microbiol 2006; 118: 148-150	ペットのウサギのイヌに咬まれた傷からCapnocytophaga canimorsusが培養された。傷は治療が成功し、ウサギは回復した。ヒト以外の種におけるC. canimorsus感染の最初の報告である。
413	細菌感染	Wien Med Wochenschr 2007; 157: 398-401	種々の病棟から集められたバイアル96本中4本は無菌ではなかった。その内3本は保存剤を含有しているマルチドースバイアル(MDV)であった。保存剤を全くまたは適量含有していないシングルドースバイアルやアドミックスバイアル28本も複数回使用されていた。MDV68本中15本は初回投与後の使用期限を越えていた。
414	細菌感染	感染症学雑誌 2007; 81(Suppl): 153-154	北海道から九州の6病院において肺疾患を有する6名の患者から得られた分離菌について、集落形態、培養・生化学的・分子遺伝学的性状並びにミコール酸のHPLCを調べた。4病院で分離された4菌株の酸化した小川培養菌細胞から抽出されたミコール酸のHPLC分析では米国CDCデータベースの既知HPLCパターンに一致するものではなく、新種と考えられた。検討した諸性状から、Runyon III群所属の1新抗酸菌種に属すると考えられた。
415	細菌感染	第56回日本感染症学会東日本地方総会 第54回日本化学療法学会東日本支部総会合同学会(2007.10.26-27)	敗血症を発症した64歳男性の血液より、嫌気性のグラム陽性球菌～短桿菌が培養された。RNA塩基配列を決定し、Actinobaculum shaaliiと同定した。同定後、SBT/ABPCの投与を行い、患者は軽快退院した。日本で初めてのA. shaalii感染報告症例と思われる。血液培養で菌種不明の嫌気性グラム陽性菌が検出された場合、同菌である可能性がある。
416	細菌感染	第81回 日本感染症学会総会・学術講演会(2007年4月10-11日) W17-2	北海道から九州の6病院において肺疾患を有する6名の患者のかっ痰または気管洗浄液から抗酸菌を分離し、分離菌の集落形態、培養・生化学的・分子遺伝学的性状並びにミコール酸のHPLCについて検討した。全ての分離菌は共通の集落形態、培養・生化学的性状を示した。分子遺伝学的にも高い相同性を示した。4つの分離菌由来のミコール酸HPLC分析の結果、米国CDCのLibrary databaseにはない新種の抗酸菌と考えられた。
417	細菌感染	日本細菌学雑誌 2007; 62(1)/第80回日本細菌学会総会	急性の増殖性腸症罹患豚の回腸粘膜より集菌した菌体を2種の細胞株(IEC-18およびHep-2)へ接種し、培養したところ、免疫組織染色によりLawsonia intracellularisが初めて確認された。培養菌より抽出したゲノムDNAの塩基配列を解析した結果、培養菌由来の数種のPCR増幅断片の塩基配列は基準菌の配列とほぼ一致した。日本の分離株は、英国由来である基準株(NCTC12656)と近縁であることが示唆された。